

『依頼』表現にみられる 母語から英語への語用論的転移現象

黒滝 真理子

(2000.12.2 発表)

1. はじめに

日本語の依頼表現の語彙的意味は「話し手自らの要求の実現を聞き手の意志や好意に働きかける」という〈要求〉であるが、談話中の機能的意味として聞き手領域にある〈勧め〉的依頼表現もある。一方、英語においては要求的依頼も勧めの依頼も同一表現で表され、その発話行為が聞き手にどのような、あるいはどれくらいの負担をかけるかでそれらは区別される。与え手が聞き手にあることを意識する英語依頼表現と受益者が誰であるかに視点を向けようとする日本語の依頼表現の相違点を考慮に入れると、日本人英語学習者の英語による「依頼」という発話行為の中に、母語である日本語から英語への語用論的転移があると考えられる。

2. 先行研究と本研究の目的

Takahashi&Beebe(1987)の「語用論的転移は目標言語 (TL) の社会文化に適用するに従い小さくなる。」に対し、Wolfson (1989) には「上級学習者は TL の母語話者と交渉する機会が多いため、多くの場面で誤用を犯す。」との考察がある。更に依頼表現の語用論的転移に関する先行研究には以下のようなものがある。丁寧度と負担度の無関係を主張する Koike(1989)に対し、Shimamura(1993)、Takahashi (1992) は「丁寧度は負担度に著しく影響される」と指摘する。更に Takahashi (1996)には「熟達度レベルと語用論的転移との間には相関関係はない」との考察がある。従来の研究では、依頼表現の転移は負担度 (相手の親疎も含む) や熟達度によって変動するといわれてきたが、他にも影響を及ぼす要因があると考えられる。

そこで本研究では、「依頼」の発話行為を日本人英語学習者がどのように英語で表現するかを調べ、日本語母語話者と英語母語話者の「依頼」表現の相違点を比較し、学習者表現にみられる日本語から英語への語用論的転移現象を考察することを目的とする。更に、その転移に影響を及ぼす要因は負担度だけではないことも確認する。

3. 英語の依頼表現

(1) Goffman(1971)や Blum-Kulka *et al.*(1989) : 依頼表現の定義。
(2) Brown&Levinson(1987) : negative politeness と positive politeness という統合的枠組みの下に、聞き手への負担度の減少や決定権依存という見地から論じられてきた(拙稿:1998)。則ち「聞き手になんらかの選択の余地を残した指示行動」と規定され、疑問文にして聞き手に断りやすい環境を与えたり、時制をずらすことにより現時点に重点をおかない分聞き手の負担を和らげる等のストラテジーがとりあげられてきた。それによると、“Will you~?” < “Can you~?” < “Would you~?” < “Could you~?”の順に丁寧度は高くなり、negative politeness の対象である間接発話が好まれる傾向にある。英語母語話者が実際に使用する最も改まった表現は、聞き手の権限内である私的領域には立ち入らず決定権を託す“Could I~?”である。これらの言語現象から英語の依頼表現に影響を及ぼす依頼状況の要因には依頼を履行する意志、能力や依頼の正当性があげられる。

4. 日本語の依頼表現

(1) 「丁寧さの原則」 : 話者が恩恵を他者へ与える表現形式は避けられ、受ける恩恵を最大にし与える恩恵を最小にする。
(2) 決定権は常に聞き手にあるが、受益者が誰かによって3通りの機能を果たす : ①利益・恩恵を話し手が受ければ要求的依頼文②聞き手が受ければ勧めの依頼文③話し手と聞き手両者が同時に受けるのであれば誘いの依頼文。

このように受益者を敏感に反映するのは、恩恵の受給関係を表す授受動詞

(「~してくれる(~して下さる)」や「~してもら(~していただく)」)の文法的配慮が深く絡むからといえよう。日本語には、聞き手の負担の軽重や話者の利益の大小を話者がどう判断するかというよりも、話者の立場から受益者が誰なのかを意識しつつ聞き手にどう接するかというような対人的過剰配慮の特性がみられる。

以上のように、授受動詞を駆使し受益者を明確にすることが大原則である日本語母語話者は、当然要求的依頼表現と勧めの依頼表現の峻別に感心をよせるであろう。英語では両者を同一構文が表し、依頼する際話者が受益者であることを明示する必要もない。以下では、これらの母語の顕著な特異性が英語学習者の中間言語に干渉エラー

として転移されたり、あるいは顕著すぎるが故に回避されたりする言語現象をみていくことにする。

5. 調査1の概要

調査1は中級レベルの英語力を有すると思われる日本人大学生150名を対象に行った。データの収集は談話完成テストにより、英語で提示された7つの場面を表す対話に対し、被験者が調査用紙を各自読み進めながら行った。そして、一部空欄となっている箇所到场面上最も適する依頼表現（要求的依頼と勤めの依頼）を英語で書き入れて完成させる方法をとった。

6. 調査1の結果と考察

6.1 要求的依頼

①対人関係に特別な配慮は要さず、かつ依頼内容の実現も比較的平易と思われるもの：聞き手の権限を認める為聞き手の行為に言及することで要請行為を行う

“Could you ~? / Would you ~? / Can you ~?” が9割を占める。

②授受動詞(borrow, lend)や視点の移動が伴う動詞(give, bring)が関わる「やりもらい」表現：受益者が話者、与え手が聞き手であることを必要に認識しすぎるせいか、英語的な許可要請表現の方が優性する。但し、英語のI型は直接的であるが、中間言語のこのI型は間接的な表現から真意を察するよう意図されたものである。即ち、日本語的にあたかも聞き手の権限内には立ち入らずに行為の決定権を聞き手に委ねているかのように見せ掛ける為、許可を与えてもらうI型で表現している。前置きや肯定文による要求表明→「察しのストラテジー」（柏崎：1993）。

③要求的依頼の3割を占める“Will you ~?”：この“Will you ~?”は本来依頼を装った指示を表し、要請力を伴い、その根幹を成すのが命令文であるので丁寧さの点からも許容度は低い（拙稿：1998）。しかしながら、日本人英語学習者は“Will you ~?”を「～していただけますか?」という「くれる」系として習得してきた。

④負担度の高い状況で“Would you lend?”、“Would you mind bringing?”を好んで使う。：
参与者の役割変化→聞き手への認識の仕方も変化。

これらの複雑さが語用論的転移を引き起こしていると考えられる。

6.2 勧めの依頼

“Would you like to~?”が圧倒的に多く、要求的依頼では全く現れなかった現象である。これは、日本語母語話者がいかに要求的依頼と勧めの依頼との峻別にこだわるを示している。英語の“Would you like to come with me?”のような文は要求的依頼と勧めの依頼両者を表す。一緒に行くことが、聞き手の利益になろうがなるまいが同一表現で表される。ところが、日本語母語話者の書いた英文では、聞き手の利益になる、則ち聞き手に積極的願望の念のある文脈でのみ“Would you like to~?”が使われている。受益者が誰であるかを明示する為の日本語の授受動詞が英語では文法化されていない為、それをなんとか表出させようと試みた結果、“Would you like to~?”に勧めの依頼という独占的意味しか認めなかったことが伺える。また、回避現象としての肯定文もみられる。

7. 調査2の概要

次に、Takahashi(1996)の考察通り、語用論的転移現象が熟達度レベルの相違によって影響されることは本当でないのかを検証してみよう。そして、それは「依頼」発話の発生する過程のどの部分と関連しているか、更に母語の言語パターンの影響によるのか、あるいはTLの習得不十分のためなのかを考察してみることにする。

調査対象は、初級レベルと上級レベルの英語力を有すると思われる日本人大学生各20名。データの収集は調査1と同様、談話完成テストにより、①本を借りる、②先生に推薦状を書いてもらうという状況設定である。

8. 調査2の結果と考察

調査2の結果、初級者の場合依頼の負担度による variation は主依頼のみにみられるが、上級者においては主依頼のみが variation をもつのではないことがわかる。そこで、様々な主依頼から派生する前後の談話がいかなるステップをふんで相手への配慮を示しながら進んでいくかという談話パターンの違いが丁寧度に影響を与えることも当然考慮に入れるべきであろう。このような会話管理の視点から分析したものに、ザトラウスキー(1993:72)の勧誘の談話ストラテジーの研究がある。そこでは、「話者交替」によらず「話段」という概念が導入されている。この枠組みで依頼の談話展開のメカニズムを分類してみると、主依頼表現の前（『pre 主依頼』:黒滝）に「依頼予

告」や「先行発話」、後（『post 主依頼』:黒滝）には「依頼応答」のような「話段」で構成される。この展開システムをもとに調査2を行った。すると、『pre 主依頼』に「情報提供」がくるか、「情報要求」がくるか、また「話段」がどのような順序であられるかに相違がみられた。

依頼の発話行為は聞き手の負担で話者が利益を得るので、Leech(1983:182)の丁寧さの公理[TACT MAXIM : (a) Minimize cost to other (b) Maximize benefit to other]に反する。そこで、上級者の場合、少なくともその事実の認識を言語的に明示するため、supportive moves（申し訳なさ・詫び）や gambits（都合伺い、理由や呼びかけ等）（Blum-Kulka : 1989）を伝えようとする。間接発話を上級者程好むのも、このような前後を導くための言語的動機づけと考えられる。「話段」の枠組みで分析した結果、中間言語の特異性として、上級者レベルは依頼の modification や supportive moves を必要以上に多用し過剰般化を起こす傾向があることがわかった。

9. まとめと今後の課題

調査1では、主に主依頼スタイルがどのような要因により変動するかをみてきた。許可を求めるI型や典型的依頼表現として位置付けられる“Will you~?”においては、本来の英語と中間言語としての英語とでその内部構造への認知の仕方が異なっている。日本語の「察しのストラテジー」が英語に言語化されてしまったが故に、社会言語学的な誤用を犯している。また、日本語には受益者が誰であるかを明示するための授受動詞があり、常に要求的依頼と勧めの依頼との峻別にこだわるが、一方英語では決定権及び与え手が聞き手にあることを全面的に意識する。この受給関係により視点の異なることが語用論的転移を引き起こし、その転移現象に影響を及ぼす要因としては、負担度のみならず依頼を履行する意志や能力、依頼の正当性や緊急性があげられることを検証した。

調査2では、TLの習得レベルにより拘束されるものは、初級者の場合主依頼表現の variation のみであるが、上級者になるにつれて言語レベルにとどまらず、その背景にある言語行動全体からみた「談話展開のメカニズム」にあることが確認された。Request Schema Model が規範的な主依頼表現と選択的な配慮表現との連続体を成している点からも、中間言語としての談話展開体系を解明していくことは今後益々必要になると考えられる。

本研究の問題点は、英語と同時に日本語のデータもとり、母語の variation もみるべきであった。それによって、実際の使用と自己申告の間にズレが生じていて、被験者の使用する依頼文とその意識間の相違が確認できたであろう。また、「談話展開」の規範は正誤の基準で判断できるものではないため、効果的かつ適切な統計処理法を検討しつつ研究結果の一般化をはかることが今後の課題となろう。

参考文献

- (1) Blum-Kulka et al.(1989) Cross cultural Pragmatics: Requests and Apologies. Norwood, N.J.: Ablex Pub.Cor.
- (2) Brown,P&S.C.Levinson (1987) Politeness:Some universals in language usage. Cambridge Univ. Press.
- (3) Goffman,E. (1971) Relations in Public: Microstudies of the Public Order. New York:Harper & Row.
- (4) 姫野伴子(1991)「依頼と勧誘：受益者表現の日英対照を中心に」『世界の日本語教育』1 (pp.69-81). 国際交流基金日本語国際センター
- (5) 井出祥子他(1987)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂
- (6) 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に－」『日本語教育 79号』 (pp.53-63).日本語教育学会
- (7) 黒滝真理子(1998)「Politeness に関する一試論」『日本実用英語学会論叢』第 6号(pp.41-51). 日本実用英語学会
Koike,D.A.(1989) Pragmatic competence and adult L2 acquisition: Speech acts in interlanguage. MLJ 73.(pp.79-89).
- (8) 小泉保(1990)『言外の言語学－日本語語用論－』三省堂
- (9) Leech,G.(1983) Principles of Pragmatics. Longman.
- (10) 佐々木倫子 (1995) 「依頼表現の対照研究－英語の依頼表現－」『日本語学』第 14 巻第 11号 (pp.61-68). 明治書院
- (11) Takahashi, T. & Beebe, L. M. (1987) The development of pragmatic competence by Japanese learners of English. JALT Journal 8.(pp.131-155).
- (12) Takahashi, S. (1996) Pragmatic transferability. SSLA 18. pp.189-223.
- (13) Wolfson, N. (1989) Perspectives: Sociolinguistics and TESOL. New York: Newbury House.
- (14) ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析 勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版

(お茶の水女子大学大学院国際日本学専攻)